

『大いなる遺産』における不安定な人間関係

大和久 吏 恵

はじめに

『大いなる遺産』(*Great Expectations*)¹⁾は1860年から翌年にかけて、週刊雑誌「一年中」(‘All the Year Around’)に掲載された。この作品は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812~1870)が発表した作品の中で唯一、題名がテーマを表明している²⁾。先に出版した『ディヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849)と同じ自叙伝の形式を取っているので、主人公の名前から『フィリップ・ピリップ』という題名でも良さそうなものだが、ディケンズは最初から『大いなる遺産』と決めていた³⁾。

この作品は主人公の成長物語であると同時に、人生において過去との決別はあり得ないことを主人公に思い知らしめ、過去を抱えたまま未来へ生きる選択をさせる試練の作品である。また、孤児を取り巻く不安定な人間関係を描いている点も見逃せない。本稿では、主人公の成長過程を踏まえつつ、不安定な人間関係について考察していきたい。

1. 虐げられる子ども

現在の日本では、子どもが家族の中心であり、個として尊重されながら育つことを当然としている。しかしほんの半世紀前は状況が違った。子沢山の家庭が多く、子ども同士の生存競争が激しかった。医療や衛生の面も不十分で、成人に達することができなかつた子どもも珍しくはなかつた。

ここでヨーロッパ社会の子どもの扱いが変化していく過程を振り返ってみたい。中世において子どもは「大人としての態度を示すようになるまで無視され」た。17世紀になると「路上の自由労働者でもなければ、金持ちやその使用人たちのペットや慰み者でもなく…純真無垢で…有益な目標と純粋な思想のもとで教育を受けるよう」躰られた。18世紀には家庭向けの啓蒙書によって、両親も子どもと「共通に教化」された。労働の面においてだが、中世では子どもも大人と同じ労働をしていたという。やがて徒弟制度が整うと、男子はたいてい12歳になると親方の元に弟子入りし、女子には家庭内でできる仕事が割り当てられるようになった⁴⁾。

それでは、19世紀のイギリスで子どもはどのような扱いを受けていたのだろうか。ここでは『大いなる遺産』に登場する2人の孤児－ピップとエステラーに注目してみたい。

ピップは年の離れた姉夫婦の元で育てられている孤児である。義理の兄に当たるジョーは鍛冶屋の親方である⁵⁾。冒頭で教会の墓地にいるピップは、両親の名前が刻まれている墓石のところにいる。そこには両親のみならず5人の兄弟姉妹の名前があった。

墓場・孤児・鍛冶屋の3点が揃って、ピップはマグウィッチに出会う。墓場は監獄船から脱出した囚人が身を隠すのに都合がよかった。ピップが孤児と知って（同じく孤児である）マグウィッチは同情から彼を殺さないことにし、ピップが鍛冶屋で生活していることがわかると、食べ物とやすりを持ってくるよう命令する。その際マグウィッチは「それぞれの質問の後に、わたしを突き飛ばす」(37) ことで、ピップが無力なことと、その生命は彼の手の内にあることをわからせようとする。また別の人物に常に見張りをさせていることもでっち上げて聞かせ、さらにピップを怯えさせる。大人のエゴを前にして、立場も肉体も弱い子どもは成す術もなく、大人よりも豊かな想像力で「別の人物」の存在を信じ、自

分をがんじがらめにしているのである。

ピップは姉であるジョージアナに「手塩にかけて」(by hand) 育てられたという。彼女は墓地から帰ってきたピップに対し、「私をいらいらさせ恐怖と心配で疲れさせるために、お前は何をしていたのか」(41)と非難する。この非難はピップを慈しむ故のものではなく、厄介者の弟を押し付けられた自分への憐憫をアピールするものでしかない。むろんピップも「私と同様に彼にも、固くて重い手で癖のように叩いていたので、ジョー・ガージャーリーと私は、両方とも手塩にかけて育てられたのだ」(39)と、故意に言葉の意味を取り違えて痛烈に回想している。

また、彼が初めてエステラに逢い、侮辱を受けたときに、ジョージアナの養育法に対して胸中を吐露する。

My sister's bringing up had made me sensitive. ...Within myself, I had sustained, from my babyhood, a perpetual conflict with injustice. I had known, from the time when I could speak, that my sister, in her capricious and violent coercion, was unjust to me.(92)

(姉の養育のせいで、私は神経過敏になってしまった。…赤ん坊のときから自分の内で、不正と絶え間なく闘争し続けていた。口がきけるようになってからも、姉の気まぐれで暴力的な制圧は、私に対して不当な扱いだった事ことを知っていた。)

しかしここで姉のジョージアナもまた孤児であることに触れておくのは、彼女に対しても公平であろう。素質に母性を持ち合わせていないにもかかわらず、弟を引き受けざるを得なかった背景には、19世紀の女性観が色濃く覗える⁶⁾。

近隣の間人が一堂に会するとどうなるか。彼らはピップに、親切な姉

のお陰で存在していられることを説教し、とりわけ俗物のパンプルチェックは何かにつけピップに居たたまれない思いをさせる。ピップは、ジョージアナを始めとして世間を「全てのものが調和を欠いていて、不正であって不公平だ」と見なしているが、大人たちは彼に「全てが満足にいている」と信じ込ませようとしている⁷⁾。行き過ぎた教訓話や当てこすりの説教は、大人の側では親愛の情を表わす小道具に過ぎないとしても、子どもにとっては精神的虐待に等しいものである。ピップは外界でも家庭の中でも無力な子どもとして、精神・肉体ともども虐待を受けているのである。

一方、もう一人の孤児であるエステラの場合を見てみよう。彼女は3歳頃から上流階級のハヴィッシュムに育てられる。ピップと同様エステラも両親を知らない。あるときピップがジャガーズにエステラの苗字を尋ねたところ、「ハヴィッシュムだ」という答えが返ってくる(263)。この会話から、エステラの本来の名前は謎に包まれたままだとわかる。墓石で自分の祖先を確認したピップよりも、彼女の出自の方が曖昧なのだ。エステラは養母ハヴィッシュムのもとで、養母の思う通りに育てられる。美しい格好をし、フランスで教育を受け、仕上げにロンドンの社交界へ送り込まれる。同じ孤児でも鍛冶屋で育ったピップとは雲泥の差である。彼女は高慢で冷淡であり、養母に服従して無気力になっているきらいもある(Ch.33)。

全編を通じて、エステラが楽しく語ったり、未来に夢を馳せる描写はない。それは彼女の育った環境を見れば納得がいく。彼女は暗い部屋の中だけで育てられ、物心ついたときから「日光はお前の敵であり、お前を破壊するものだ」と養母から教え込まれる。外部からやって来る親類は、ハヴィッシュムの遺産狙いばかりである。エステラを慈しみ、日の光を与えてくれる大人はいない。日光は暖かさや肯定的な感情を象徴する。物理的にも象徴的にも、彼女は外界と日の光から遮断されて育つのであ

る。養育方針に関しては次の章に譲るとして、子どもへ正当に与えられるべき権利—外界との接触や、日光に当たること—を剥奪しているのは、虐待行為である。

日の光が照っているときには決して見ることのできない「星」という意味の名を彼女が持ち、誰もその名前が約束する生活ができない「満足館」(Satis House)で生活する設定から、物語の行く末が暗示されている。不幸な結婚生活の果て、廃墟となった「満足館」に戻ってきたエステラは、月光の下でピップと再会する。決して「日光の下で」ではないのである。

2. 子どもの反抗

子どもは反抗期を経て大人になっていく。今まで自分の保護壁となっていた親と対決し、その壁の外へ出る体験は、大人になるための通過儀礼である。先の章では、大人の庇護のもとで一方的に虐げられた孤児の姿を見てきたが、今度は彼らが成長して庇護者と向き合うさまに焦点を当ててみたい。

ジャガーズが遺産相続の見込み話を持ってきたとき、ピップの転機が訪れた。これはハヴィッシュムのしていることで、自分を紳士に仕立て上げ、最終的にはエステラと結婚させる心積もりなのだろうと、ピップは都合の良いように考える。しかも、紳士になりたいという一度はあきらめた夢がかなうとあって、彼は有頂天になる。同時に今まで押さえてきた不満が爆発し、慇懃無礼な鼻持ちならない態度で、ジョーやビディに接するようになる(Ch.19)。

ロンドンへ出てきて、ますます思い上がったピップをジョーが訪ねてきたとき、彼は直接ジョーに反抗する(Ch.27)。しかしジョーは常に「ピップの道徳の中核」⁸⁾なのである。ピップの理不尽な反抗に対して、ジョーは自分の思うところを率直に語り、ピップを矯正する。ピップは

この先幾度かジョーに反抗したり、ジョーを避けたりするが、その見返りに自分が苦い思いを噛みしめるのだ。

何度反抗することがあっても、ピップとジョーの仲が決裂しないのは、根底に愛情と尊敬があるからである。ピップが子どものときは、ジョーだけが味方だった。しかし恐ろしいジョージアナをも愛すジョーの博愛主義を、ピップは理解できなかった。ジョーは家庭内で虐げられる母親を見て育ったので、妻に辛い思いをさせたくなかった。妻だけでなく子どもに対しても同じ気持ちだった。だから彼はジョージアナを娶ったときピップを連れてくるように言い、その後も彼女の暴力に耐え、ピップをかばおうとしていたのだ。大人にも子どもの時代があったとは、子どもには信じ難い事実である⁹⁾。ピップがジョーの想いを理解しようがしまいが、ジョーは、かまわず「わしらはいつでも友だち」(43)と言う。ピップが道徳的な観点でジョーを超えることはない。しかし自分に愛情をかけ、保護してくれたジョーの胸を借りることで、自己を啓発し、もう一人の養父であるマグウィッチ(プロヴィス)に出会ったとき、その存在を受け入れられる度量を持つようになる。ピップは孤児であるが、本当の父親以上の存在であるジョーのもとで、ジョーとは違った個性や思考をもつ大人へと成長する。

一方エステラの反抗はただ一度であるが、養母であるハウィンシャムとの決定的な決別となるものである。

‘You should know,’ said Estella. ‘I am what you have made me. Take all the praise, take all the blame; take all the success, take all the failure; in short, take me.’ ... ‘Who taught me to be proud?’ returned Estella. ‘Who praised me when I learnt my lesson?’ ... ‘Who taught me to be hard?’ returned Estella. ‘Who praised me when I learnt

my lesson?’ ‘But to be proud and hard to me!’ Miss Havisham quite shrieked, as she stretched out her arms. (322-3)

(「あなたは知るべきです。私はあなたが作ったものなのです。全ての賞賛と非難を受け取ってください、全ての成功と失敗を受け取ってください、つまり私を受け取ってください」とエステラは言った。…「誰が私に高慢になるよう教えたのですか。私がその課業を身に付けたとき、誰が私を褒め称えたのですか」とエステラは返した。…「誰が私に無情になれと教えたのですか。私がその課業を身に付けたとき、誰が私を褒め称えたのですか」とエステラは返した。「だからといって私に対して高慢で無情になるとは」とハヴィッシュムは両腕を差し伸べながら、ほとんど金切り声で叫んだ。)

狂ったようになるハヴィッシュムに対し、エステラは何も取り乱さない。彼女にも生命を維持するハート（心臓）はあるけれど、「優しさ…同情や感傷」(259)を入れるハート（心）は持っていないからだ。養母の慟哭で彼女が変わる道理はない。「目には目を」の手痛いしっぺ返しを喰った養母と同様、やがて彼女も痛い目にあう。自分と同じ類の、しかしもっと冷酷なヘンリー・ドラムルによって「折り曲げられ、打ちのめされた」(493)のである。

エステラは、婚約者に捨てられたハヴィッシュムの恨みを晴らす道具として、言い寄ってくる男性の心を壊してしまうように育てられる。前の章で確認したように、屋敷に閉じ込められた状態では会える人間に限られ、海外に送り込まれても自由恋愛なぞもっての他だったに違いない。そんな養母の言いなりの生活に嫌気がさし、彼女は自分で羽ばたくために結婚相手を選ぶ。その相手がドラムルだと知って、ピップは思いとど

まるようエステラを説得する。「僕のことは永久に脇へ置いておいていい…だがあなた自身をドラムルなんかよりもっと価値のある男に与えてくれ」(377)しかしハート(心)を持たない彼女に、彼の叫びが届くはずがない。彼女は自分で決めた通りドラムルと結婚し、哀れにも制裁を受けてしまうのである。孤児エステラは、幼い頃に母親と死に別れ、父親に甘やかされて育った養母の轍を踏んだのだ。

失敗だった結婚生活の中で、彼女はピップの捨て身の愛情がどんなものであったかを理解する。そして作品の最後で「私はもっと良い形になったと思う」と彼に告げる。エステラは養母との絆と夫との絆を破壊して、初めて「優しさ…同情や感傷」の入ったハートを手に入れた。そこに至るまでには、辛くて長い紆余曲折を強いられたのだ¹⁰⁾。

3. 親子の逆転

ジョージアナは亡くなるときにジョーに許しを請い、「ピップ」と呼びかける(Ch.35)。まだ息が続いたら彼にも許しを請うつもりだったのであろう。ハヴィッシュムは、自分の名前の下に「あなたを許す」と書いてくれるようピップに頼む(Ch.49)。ジョージアナは廃人になってから「気質が良くなり、辛抱強くなった」(Ch.16)。ハヴィッシュムもエステラの反抗にあった後、態度が軟化する(Ch.38)。かつてはピップを虐げる側だった2人なのに、ジョージアナは亡くなる前にピップの名を呼び、ハヴィッシュムは許しを請い、すがりつかんばかりの行動をとる。これは無力な子どもが母親の愛情を求めて両手を伸ばす構図と似ている。

ディケンズの作品ではしばしば、親子の逆転が描かれている。これは多くの先行研究で指摘されているように、ディケンズの生い立ちと関連がある。家運が傾き始めてからは学校に行けず、生活費を得るために靴墨工場で働かされたディケンズ少年の目に、家族が監獄に入れられる状況を回避できなかった父親はどのように見えたのだろうか。また遺産の

お陰で監獄を出た後も、靴墨工場で働かせようとした母親の姿を「忘れることはないし…忘れることはできない」¹¹⁾と語っている。母親は生涯彼の胸中を理解することはなく、彼もそれを口に出さなかった。『大いなる遺産』執筆時には50歳を目前に控えていたディケンズだが、心の内に住む10歳過ぎの少年は母親との葛藤の只中に居続けた。ピップを育てたジョージアナ、そしてエステラの養母であり彼の勘違いによって将来の養母だと思い込んでいたハヴィッシュが、ピップに懺悔する。ピップの母親的存在だった2人の女性が、ピップに懺悔するという設定に、ディケンズ親子の母子関係がオーバーラップしてくる。ディケンズの深層心理が盛り込まれていると言っても過言ではないだろう。

一方、囚人のマグウィッチは第二の養父としてピップの前に現れる。彼の登場は今回もピップに非常なショックを与え、転機となる。イギリス本土で見つかれば死刑を求刑されるマグウィッチは、彼の保身を図って奔走する養子（ピップ）の指示に大人しく従う。父子の間で立場の逆転が起きている場面である。遺産相続の見込みで少年に夢を持たせ、自分が姿をあらわすことでそれが水泡に帰したことなぞ露知らず、彼は養子に感謝しつつ安らかに死んでいく。父親の家計管理能力不足のため、何十年も口外できないほど辛い体験をしたディケンズ。純粋な恩返しも含まれているが、養父の自己満足で翻弄されたピップ。両者の無力感は重なり合うが、父親の存在に対するわだかまりは、母親に対するものよりも薄まっている。

以上見てきたように、『大いなる遺産』では親子の立場が逆転する場面が繰り返される。それは子どもが成長して親を追い越す瞬間ではなく、親が死期を目前とした瞬間である。人生を終えようとする老人と、これから人生を始めようとする子どもとは、密接な関係があるという¹²⁾。懺悔をするピップの姉とハヴィッシュ、逃亡生活に入ると従順になったマグウィッチ。いわば子ども返りした彼らが求めたものは、「許された子

どものように受け入れられる」(481)¹³⁾ ことだった。

4. 犯罪と子ども

繰り返してきたように、ピップとエステラは孤児である。しかし彼らの間には様々な相違がある。その一つは、「犯罪」との関わりである。ピップは冒頭から犯罪と縁が切れない。脱走した囚人（マグウィッチ）と遭い、彼のために盗みを働く。自分が殺されないためにはそれしか方法がなかったのだ。実はマグウィッチも孤児であり、社会で不当に扱われ、生き延びるために犯罪者となっていた。ピップはロンドンでも金の管理者である弁護士（ジャガーズ）の好ましくない裁判について知り、その事務員と連れ立ってニューゲートの監獄を訪れたりもする。常に犯罪と関係する場所にいるのだ¹⁴⁾。一方エステラはハヴィッシュムのもと、犯罪とは縁のない世界で養育される。社交界に出てからも、犯罪と関わることはない。

また、先に指摘した出自の曖昧さも相違の一つである。ピップは墓石から出自を知るが、エステラに到っては自分の出自を不思議に思うことすらない。そして出自が曖昧な人間がもう一人いる。ジャガーズの召使である。ピップは時折エステラと召使から何かを感じ取ることがあるが、その感覚の謎は終盤まで解明されない。解明されるのは、マグウィッチが二度目に出現してからである。マグウィッチと召使はかつて夫婦であり、娘が一人いたものの、犯罪者の親を持つ子どもの行く末を案じてジャガーズに預けた。その子どもがエステラである。つまり彼女は、犯罪者の娘なのである。彼女は犯罪の渦中にいることを、誰からも知らされなかったのだ。

マグウィッチの出現で、ピップが享受してきた「遺産」の意味が変わる。一転して、(倫理的に) 使うことのできない「負の遺産」となる。ピップは今までの放蕩生活にけりをつけ、ハヴィッシュムにハーバートの

援助を申し出る。皮肉なことに、他人に分け与える金があるときよりも、無くなってからのほうが、ピップは有益な使い方をする。マグウィッチの逮捕後、無一文になったピップはハーバートのところで雇われる。元はマグウィッチの遺産を彼の事業援助に当てていたのだが、ハヴィシャムの遺産へ援助をシフトさせておいたことで、ピップは間接的に両者の遺産を手に入れることになる。むろん労働という正当な手段を通じて。

エステラの出自と遺産を巡るからくりを知って初めて、ピップは「全てのものが調和を欠いて、汚れていて不公平な」大人世界の呪縛から解放される。エステラもまた彼と同じ呪縛をうけていたのだ。彼らは同じ「父」を持つ、表裏一体の同士だったのである。

まとめ

『大いなる遺産』の前半は遺産相続の見込みに胸をふくらますピップの立身出世物語であるが、後半は死と謎解きに満ちた作品となる。一貫して描かれているのは、題名にある遺産の行方ではなく、不安定な人間関係である。両親に死なれ孤児となった上に、弟の世話まで押し付けられたジョージアナ。彼女とピップの間には常に緊迫感が漂い、虐待がコミュニケーションの手段となっている。婚約者に捨てられ、男性に対する復讐の道具としてエステラを育てたハヴィシャム。しかし彼女がエステラに植え付けた高慢と冷淡さで、逆に自分の心を壊されてしまう。生き延びるためにピップを捕まえ、盗みを働かせたマグウィッチ。ピップのために金を稼いだものの、ピップには喜ばれず、逮捕と同時に財産は没収される。その他ジャガーズとウェミック、ハヴィシャムと親族など、緊張感を強いられる不安定な関係を挙げていくのには事欠かない。

ピップは遺産相続の見込みで舞い上がっていた自分の行為に対する償いとして、受け入れるべき大人を受け入れ、虐待された孤児でありながらも前向きに生きていこうとする。その姿勢は、一連のマグウィッチ騒

動が終わり、ピップが衰弱と昏睡状態から快復したときに、完全なものとなる¹⁵⁾。ピップはジョーとビディの結婚を見届け、彼らに感謝した後、ハーバートの居る外国へ発つ。

数年後に帰国したピップは、ジョーたちの子ども（その子どももピップという名前だった）を育てたいと申し出る。彼はその子どもの内に、自分の幼い頃を見いだしたのだ¹⁶⁾。しかしビディはその申し出を断る。「いいえ、だめよ。あなたは結婚するべきだわ。」(490) 短いけれど印象的なこの場面の背景には、新たな孤児を生み出したり、大人の道具にされる子どもを作り出すまいとするビディの、そしてディケンズの意図が込められているのである。

ディケンズはビディに申し出を断らせたものの、ピップを放っておくことはしない。大人の犠牲となって過ごした「満足館」でエステラと邂逅させるのである。ピップはここでエステラとの長年にわたる不安定な関係を清算しようとする。それはずっと引きずっていた、子ども時代からのわだかまりであった。

作品を解釈するにあたり、孤児に焦点を当てる割合が多くなったが、不安定な人間関係は19世紀の孤児の専売特許ではない。21世紀を生きる私たちが抱えている古くて新しい関係である。過去を抱え外部からの圧力に翻弄されながらも、人は未来へと生きていかなければならない。仮に自分が犠牲者ならば、新たな犠牲者を作り出さないようにすること。幸運は人と分かち合うこと。140年の時を超え、ディケンズの残した普遍の「遺産」から学んだことは、混沌の現在そして未来を生き抜くための糧となるだろう。

Great Expectations のテキストは Penguin Books 版 (1985) を使用した。
本文中 () 内の数字はこの版のページを示している。

- 1 *Great Expectations* は『大いなる遺産』という翻訳名で知られているが、『大いなる遺産相続の見込み』とするほうが正確である。
- 2 Bernard N. Schilling. *The Rain of Years: Great Expectations and the World of Dickens*. Rochester: University of Rochester, 2001. 64-5
- 3 John Forster. *The Life of Charles Dickens*. Vol.1. London: Everyman's Library, 1966. 284
- 4 アニタ・ショルシュ著 北本正章訳『絵で読む子どもの社会史—ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ』東京：新曜社1992「第一章：子どもの本性と養育」を参照のこと。
- 5 鍛冶屋は下級職人である。
- 6 西条智子「ミセス・ジョーと『女性』の領域と役割」(松村昌家編『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』—読みと解釈』東京：英宝社1998) 189-218.
- 7 Jack Rowlins. “*Great Expectations*: Dickens and the Betrayal of the Child.” *New Casebooks: Great Expectations*. Ed. Roger D. Sell. London: Macmillan, 1994. 81.
- 8 Schilling. 73.
- 9 児童文学において、老人と子どもが関わる作品によくとりあげられるテーマである。
- 10 小池滋「子どもが大人の父となる時」を参照のこと。(小池滋『ディケンズとともに』東京：晶文社1988)
- 11 Forster. 32.
- 12 児童文学には、このテーマで書かれている作品が多い。例えば『トムは真夜中の庭で』、『グリーン・ノウの子どもたち』など。
- 13 闘病生活を終え、新たな人生を歩もうとしたピップも、ビディにそれを求めた。理想の母性である。
- 14 新野緑「震える『自己』」(『チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』—読みと解釈』) 283-322.
- 15 エイドリアンは、ピップの衰弱と昏睡状態を、マグウィッチによって創られた性質の象徴的な死であると見なしている。
- 16 ピップは折に触れ子ども時代を回想する。奇しくも先のYBBI(国際児童図

書評議会)にて美智子皇后が「心の中にすむ小さな女の子に誘われて…」と発言されたことは記憶に新しい。(読売新聞2002年10月3日)

参考文献

Arthur A. Adrian. *Dickens and the Parent-Child Relationship*. Ohio: Ohio University Press, 1984.

江藤秀一・飯田敏博編『作家と生きた女たち—エリート公務員夫妻の愛から不倫そして駆け落ち結婚まで』東京：金星堂 2002

(おおわく りえ 職業能力開発総合大学校)